HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | モヨロ貝塚の発掘調査（1947年・1948年）の内容を掘り起こす ： ガラス乾板写真の検討から |
| Author(s) | 熊木, 俊朗; 久保, 大輔 |
| Citation | 北海道大学考古学研究室研究紀要, 5, 54-69 |
| Issue Date | 2026-01-08 |
| DOI | https://doi.org/10.14943/2115.98747 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/98747 |
| Type | departmental bulletin paper |
| File Information | 07 WS Kumaki and Kubo.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

■論文

# モヨロ貝塚の発掘調査（1947年・1948年）の内容を掘り起こす
## －ガラス乾板写真の検討から－

熊木 俊朗[a], 久保 大輔[b]

a 東京大学大学院人文社会系研究科　kumaki@l.u-tokyo.ac.jp
b 北海道大学総合博物館

要旨　東京大学常呂実習施設がデジタルアーカイブとして公開しているモヨロ貝塚の発掘調査（1947年・1948年）の写真には、報告書に掲載されていないものが多数含まれている。また、デジタル化によって遺構や遺物の詳細が読み取れるようになったため、この公開によって以前よりもはるかに多くの情報が得られるようになった。本稿ではこれらの写真を読み解きながら、発掘された墓に関する新たな画像情報の提示や、副葬された土器の型式編年の再検討、竪穴住居内の骨塚の数や時期、規模の考察などをおこなった。本稿の試みは、戦後のモヨロ貝塚の発掘調査の内容を、学史上の通過点としてではなく現在の研究の中に位置づけて再評価するものとなろう。

キーワード ：オホーツク文化、モヨロ貝塚、ガラス乾板写真、デジタルアーカイブ

### はじめに

1947 年・1948 年・1951 年に東京大学・北海道大学・網走市などの研究者からなる「モヨロ調査団」によって実施された網走市モヨロ貝塚の発掘調査は、戦後の日本考古学の出発点として学史の上でもよく知られている。東京大学大学院人文社会系研究科附属常呂実習施設には、この「モヨロ調査団」による発掘調査の記録であるガラス乾板写真が所蔵されており、そのうちの主要な 142 点はデジタルアーカイブ（以下、DA と略）として 2019 年 2 月から web 上で公開されている（注 1）。これらの写真には報告書（駒井編 1964。以下、報告書と略）には掲載されていなかったものが多数含まれており、また、高精細なスキャンによって遺構や遺物の詳細な情報が読み取れるようになったものも多い。本稿では、デジタル化されたこれらの乾板写真を読み解くことによって「モヨロ調査団」による発掘成果を再検討し、報告書には掲載されなかった情報を新たに掘り起こすとともに、写真から得られた情報をその後に大きく進展した現在の研究の中で再評価してみたい。

本稿は、人骨の同定は久保が、それ以外の部分は主に熊木が担当し、各節の末尾に担当を記載した。なお、本文の 1、2-a)、2-b)、2-d)、3-a）の各節には、公開されている DA や他の論文等（熊木 2018b、熊木 2020）ですでに明らかにした内容が含まれているが、本稿でさらに追加した情報もあるためここで再度取り上げることとした。（熊木）

### １．常呂実習施設所蔵のモヨロ貝塚調査ガラス乾板写真について

常呂実習施設が所蔵するモヨロ貝塚調査のガラス乾板写真の詳細と、DA として公開されるまでの経緯については web サイトで詳細を述べているので（注 2）、ここでは概略のみを記す。

この乾板写真は、元々は本郷の東京大学大学院人文社会系研究科考古学研究室に保管されていたもので、2001 年に常呂実習施設に全 200 点が移管された。DA ではこの 200 点から、画像が判別できないものや被写体が特定できないもの、室内で遺物や実測図を撮影したもの、画像がほぼ同一で重複するものを除外し、142 点を公開している。これらの写真は、デジタル化の際の整理番号（D- の番号）と web 掲載順の番号（web コンテンツ番号、以下 WN と略）の両者で管理されているが、本稿では後者の番号（WN- の番号）を引用する。

なお、報告書に掲載されたモヨロ貝塚関連の写真点数は、室内で撮影された遺物写真を除くと 42 点となるが、このうち 8 点は乾板写真の所在が不明であったため DA には掲載されていない。これらの所在不明の写真については、本稿での検討対象には含めていない。（熊木）

### ２．墓番号の同定と墓の時期の再検討

#### a）発掘された墓の概要

「モヨロ調査団」の調査で発掘されたオホーツク

北海道大学考古学研究室研究紀要　第5号（2026）
*Bulletin of the Laboratory of Archaeology, Hokkaido University* 5（2026）

受付 Received 2025年9月24日　24th September 2025
受理 Accepted 2025年10月11日　11st October 2025

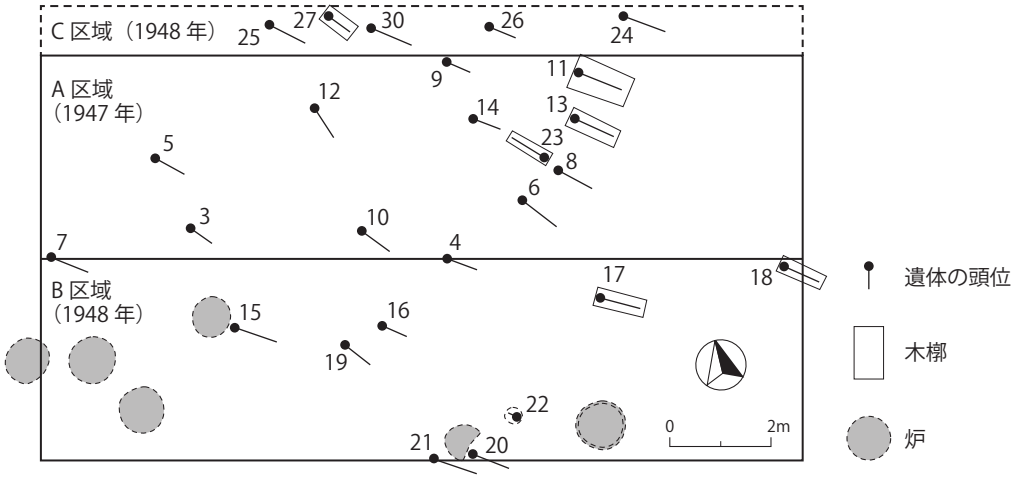



図 1　モヨロ貝塚「貝塚トレンチ」内　墓の位置（駒井編 1964）

文化の墓は下記のとおりである（駒井編 1964）。

① 7 号竪穴と 10 号竪穴の東側に位置する貝塚に設定された、いわゆる「貝塚トレンチ」内で 1947 年・1948 年に発掘された 26 基（3 号墓～ 27 号墓・30 号墓）（図 1）。

② 10 号竪穴の西壁外側の貝塚に設定されたトレンチ内で 1948 年に発掘された 2 基（28 号墓・29 号墓）（図 7A）。

③ 1951 年調査の A トレンチ及び B トレンチ内で発掘された 3 基（1951 年 1 号墓～ 3 号墓）。

このうち、特に①と②については報告書に掲載された画像や実測図等が限られていたため、DA で公開された写真によって新たな情報が多数得られることになった。よって、本稿では①と②の計 28 基の墓について検討する。

まずはそれぞれの墓について、報告書掲載写真の有無、乾板写真の有無、人骨の保存程度などを表 1 にまとめてみた。報告書にはこれらの墓の遺構実測図は全く掲載されておらず、遺構写真も掲載されているのは 11 基のみであるため、写真の無い 17 基は説明文と一覧表の記載のみが報告されていた（副葬品の写真が掲載されている墓もあるが少数である）。この 17 基のうち、5 基は DA の写真に付随した注記や撮影された遺構と遺物の内容から、4 基は DA の写真の人骨画像と北大学総合博物館に保管されている実物（北大医学部解剖学教室が収集した人骨で、2025 年 4 月から北大総合博物館の管理下にある）との対比から、それぞれ該当する DA の写真が特定され、写真記録が新たに参照できるようになった（表 1 で網掛けの墓）。

写真の特定の詳細は下記に述べるが、この特定作業を経てもなお 8 基の墓については写真記録が得られていない。その理由は定かではないが、表 1 の内容をみると、1947 年の調査（3 号～ 14 号）では 12 基中 11 基の墓で写真が現存している一方、1948 年の調査（15 号～ 30 号）では人骨の保存程度の低い墓に写真が無い傾向が認められる。これは根拠が薄い推測ではあるが、当時、調査も 2 年目となって資料が蓄積されたため、人骨の残りの悪い墓では撮影そのものが省略されていた可能性なども考えられる。（熊木）

b）報告書未掲載の写真はどの墓か①　注記及び遺構と遺物からの同定

DA で公開された墓の写真には報告書に掲載されていないものが多数含まれており、掲載写真との対比のみでは墓番号の特定が難しい写真もあった。それらのなかで、付随する注記や撮影された遺構と遺物の内容などから墓番号が特定できたもの（3 号、8 号、9 号、16 号、21 号の各墓の写真）について、特定の鍵となった根拠と判断の過程を述べる。

3 号墓：図 2A の写真は、常呂実習施設が所蔵する原板の紙焼きに「No.14 人骨第三号（2）」という注記が書かれていた。遺構の特徴等に関して報告書の記載（駒井編 1964：第 1 表など）との間に矛盾は認められなかったため、注記をもとに 3 号墓の写真と判断した。なお、3 号の被甕土器の文様は報告書では「刻文」とされている。図 2A とは別の写真（図 2B）を拡大してみても口縁部は不鮮明で詳細が分かりづらいが、肥厚帯があるようにもみえる。頸部以下は無文とみられるため、口縁部に刻文を有するのであれば熊木の土器編年（熊木 2018b）では刻文期（前半・後半のどちらかは不明）に位置づけられる。

8 号墓：図 2C の写真は、原板の紙焼きに「No.32 貝塚出土　人骨第八号」という注記が書かれてい

表1　モヨロ貝塚出土オホーツク文化の墓（1947年・1948年調査）

| 墓番号 | 報告書<br>写真掲載 | 乾板写真 | 人骨<br>保存程度 | 人骨<br>保管状況 | 被甕土器の分類<br>（駒井1964） | 被甕土器の編年<br>（熊木2018a） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 3号 | | ○ | ○ | ○ | 刻文 | 刻文期 |
| 4号 | ○ | ○ | ◎ | ○ | 刻文（2個体） | 刻文期（後半？） |
| 5号 | ○ | ○ | ○ | ○ | 隆起式浮文 | 貼付文期前半 |
| 6号 | ○ | ○ | ○ | ○ | 刻文（2個体） | 沈線文期前半（2個体） |
| 7号 | ○ | ○ | ○ | ○ | 貼附式浮文 | 沈線文期後半 |
| 8号 | | ○ | ○ | ○ | 貼附式浮文 | 貼付文期後半 |
| 9号 | | ○ | ○ | ○ | 貼附式浮文 | （詳細確認不能） |
| 10号 | ○※1 | ○ | △ | ○ | 貼附式浮文 | 沈線文期後半 |
| 11号 | ○ | ○ | △ | （○） | 刻文 | 刻文期前半 |
| 12号 | | ○ | ◎ | ○ | （分類の記載なし） | （詳細確認不能） |
| 13号 | ○ | ○ | △ | （○） | 刻文 | 刻文期後半 |
| 14号 | | | △ | （○） | （破片のみ） | （詳細確認不能） |
| 15号 | ○ | ○ | ◎ | △ | 刻文 | 沈線文期前半 |
| 16号 | | ○ | △ | ○ | 刻文＋貼附式浮文 | 沈線文期後半 |
| 17号 | | | △ | （○） | － | |
| 18号 | | | △ | | － | |
| 19号 | ○ | ○ | ○ | △ | 刻文 | 沈線文期前半 |
| 20号 | ○ | ○ | ◎ | ○ | 刻文＋隆起式浮文 | 刻文期後半 |
| 21号 | | ○ | △ | （△） | （破片のみ） | （詳細確認不能） |
| 22号 | ○※2 | ○ | △ | （○） | － | |
| 23号 | | ○ | △ | △ | － | |
| 24号 | | | △ | | （破片のみ） | （詳細確認不能） |
| 25号 | ※3 | | △ | | 刻文 | （詳細確認不能） |
| 26号 | | | △ | | 刻文＋隆起式浮文 | 刻文期後半※4 |
| 27号 | | | △ | | － | |
| 28号 | | ○ | ○ | △ | （分類の記載なし） | （詳細確認不能） |
| 29号 | | ○ | ○ | ○ | （分類の記載なし） | 沈線文期後半 |
| 30号 | | | △ | | （分類の記載なし） | （詳細確認不能） |

報告書写真掲載：○は駒井編1964に写真が掲載されているもの

乾板写真：○は常呂実習施設が所蔵し、DAで公開されているもの

人骨保存程度：◎良好、○やや良好だが計測不能、△腐食が強い（駒井編1964：41頁第1表）

人骨保管状況：○は写真で確認できる骨格全体が現存するもの、（○）は人骨が写った写真がないため、荷札等の情報に基づいて墓番号と対応づけたもの、△は四肢・体幹骨が所在不明で、写真で確認できる頭骨が現存するもの、（△）は四肢骨が所在不明、頭骨は現存するが保存不良のため写真による同定が困難で、荷札等の情報に基づいて墓番号と対応づけたもの

被甕土器の分類（駒井1964）：－は被甕土器が伴わないもの

※1：駒井編1964の掲載写真（11頁Fig.4）に墓番号の記載なし

※2：駒井編1964の掲載写真（12頁Fig.7）に墓番号の記載なし

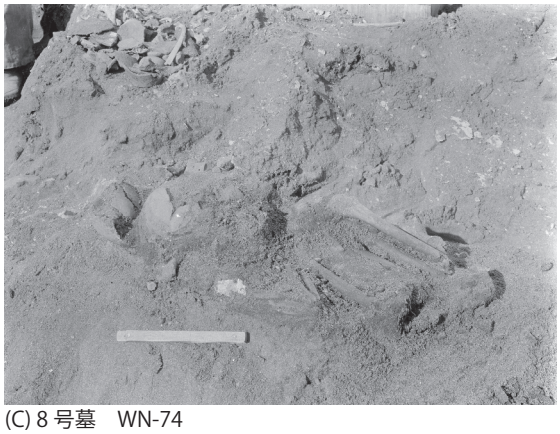
※3：駒井編1964では25号として掲載されているが（31頁Fig.11）、15号の誤記

※4：墓の写真記録は確認できないが、本稿で被甕土器の実物が特定された

網掛けは本稿での特定により写真記録が新たに参照できるようになった墓

(A) 3 号墓　WN-60

(B) 3 号墓（被甕土器拡大）　WN-59 拡大


(C) 8 号墓　WN-74

(D) 9 号墓　WN-75

(E) 16 号墓　WN-92

(F) 21 号墓　WN-100

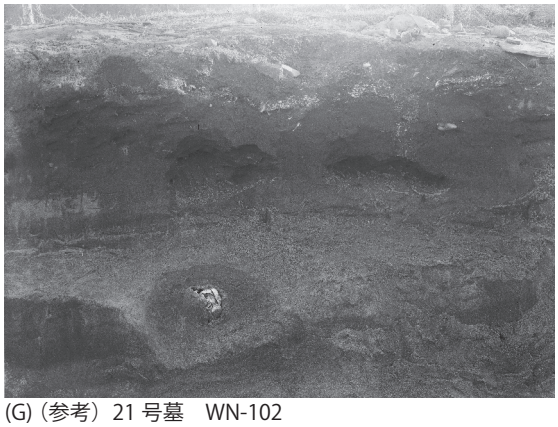

(G)（参考）21 号墓　WN-102

図 2　墓番号が特定された写真（注記・遺構・遺物の特徴から）

た。8 号の被甕土器の文様は、報告書では「貼附式浮文」（駒井編 1964：49 頁）とされている。写真では 3 本以上が一単位となる貼付文が確認できるため、熊木の土器編年では貼付文期後半となる。土器のこのような特徴を含めて報告書の記載との間に矛盾は認められなかったため、注記をもとに 8 号墓の写真と判断した。

9 号墓：図 2D の写真は、原板からの紙焼きに「No.33　貝塚出土人骨第九号（2 枚ノ中　1)」という注記が書かれていた。写真からは被甕土器の文様などの詳細は確認できなかったが、それ以外の遺構の特徴等に関して報告書の記載との間に矛盾はなく、注記をもとに 9 号墓の写真と判断した。

16 号墓：図 2E の写真には付随する注記がなかったため、撮影された遺構と遺物の状況から該当する墓を検討した。この写真の内容に最も近いと思われたのは、16 号墓の報告書の所見（駒井編 1964：28-29 頁）である。その所見は、直径 13 ～ 14cm の平石が 7 個、貝殻を混じて平らに敷き詰められ、その下には厚さ約 35cm の貝層があってその中に被甕土器がある、というもので、記述された内容はこの写真と概ね一致する。写真と所見で異なるのは平石の数で、写真の方が少なくみえる点が問題となる。この点については、発掘時に平石を確認した後に掘り下げが進み、石の一部が外された状態でこの写真が撮影された可能性を考慮した。16 号墓の被甕土器の文様は、報告書では「口縁部と頸部に刻文を並列囲繞し、胸部には貼附式浮文 2 条と小円形の象形文を囲繞している」（駒井編 1964：50 頁）とされる。写真では口縁部の文様は確認できないが、肩部の文様は報告書の記載と一致している。以上の点を根拠として、これを 16 号墓の写真と判断した。なお、副葬品を撮影した報告書の写真頁（駒井編 1964：62 頁 Fig.7）（図 9A）には誤記があり、報告書では 14 号墓の副葬土器とされた図 9A-14 の特徴が、図 2E や、上述した 16 号墓の被甕土器の報告書所見と一致する。この図 9A-14 の土器を 16 号墓の被甕土器とみなして良いならば、これは熊木の土器編年の沈線文期後半に相当する。

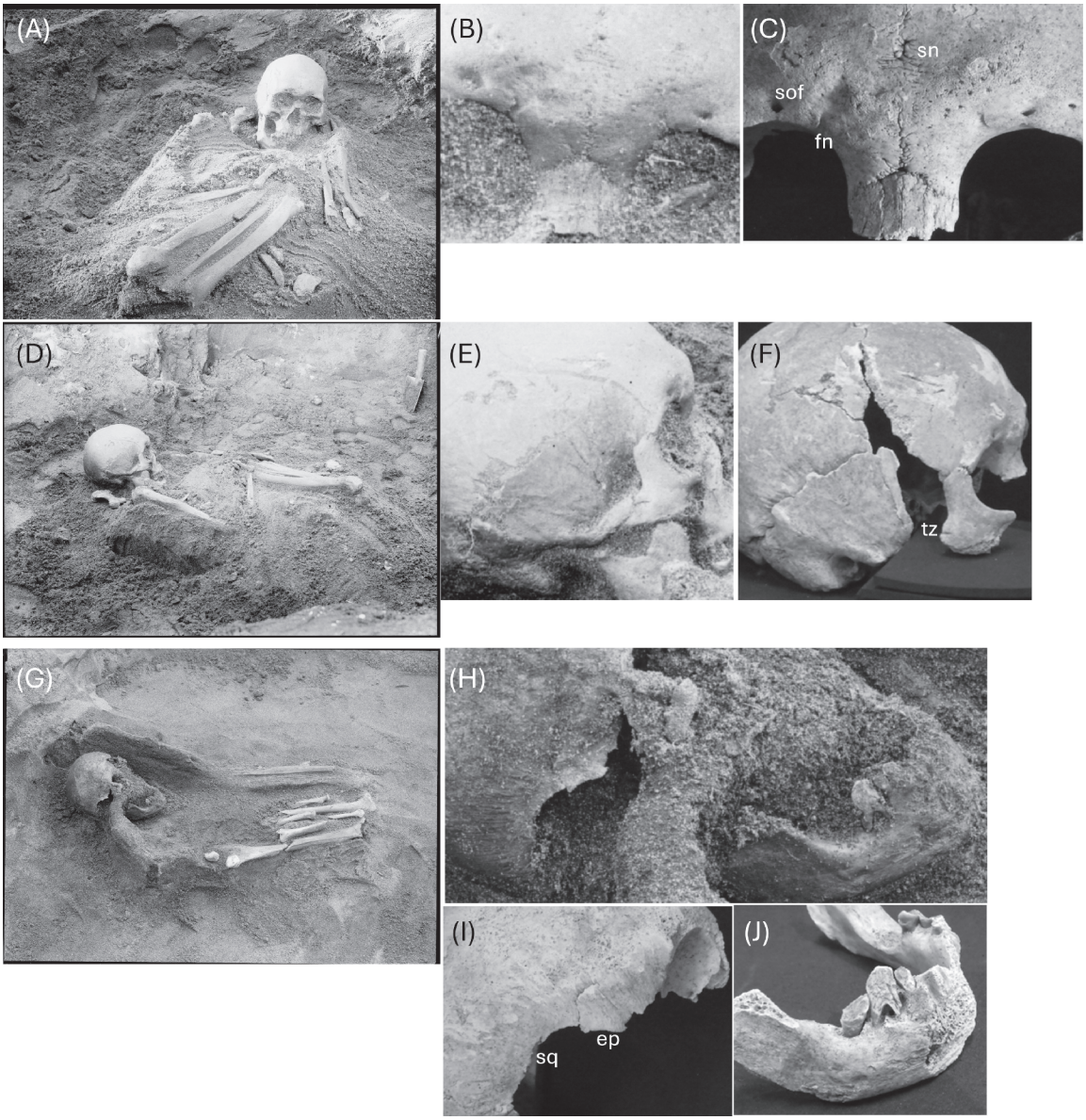
21 号墓：図 2F の写真も付随する注記はなかったため、遺構の特徴から該当する墓を検討した。決め手となったのは 22 号墓の写真（図 2G）である。この写真では、画像の左下に、墓の上面が「ホッキ貝」で覆われた幼児の墓である 22 号墓が写っている。その右上方のトレンチの壁面にある長楕円形の窪みは、その上部の壁面に見られる貝層断面の形が一致することからみて、図 2F の墓の発掘が完了した後の墓坑の痕跡と判断できる。22 号墓との位置関係（図 1）から推測すると、これは 20 号墓ないし 21 号墓の痕跡と考えられるが、図 2F が 20 号墓の写真（駒井 1964：36 頁 Fig.13）ではないことは明らかなので、21 号墓を撮影したものと判断した。ちなみに報告書 41 頁の第 1 表では 21 号墓には被甕土器 1 点が伴うとされており、図 2F との間に矛盾があるが、同じ報告書の別の表（54 頁の第 1 表）では 21 号の副葬土器は無文の土器破片 1 点とされており、おそらくは後者の表の記載が正しいと考えられる。（熊木）

### c）報告書未掲載の写真はどの墓か②　人骨からの同定

前節と同様に墓番号の特定が難しいとみられた DA の写真のなかには、人骨の画像と北大総合博物館に保管されている実物の対比から墓番号が同定できたものがある（12 号、23 号、28 号、29 号）。ここではそれらの墓に埋葬されていた人骨に関して、同定の根拠と保管状況を記す。

第 12 号人骨：写真 WN-103 及び WN-104 に写る埋葬人骨は北大総合博物館に「最寄 98」として保管されている。鼻上縫合の走行、右側がやや大きい眼窩上孔、右前頭切痕に連続する眉弓上の窪み、右側頭線付近の骨表面の傷、横頬骨縫合痕跡など、写真で確認できる特徴が実物と明確に一致する（図 3A–F)。「最寄 98」は「十二号 十月十一日 昭和二十二年十月発掘」、「22 年度モヨロ 12. 老年男」と書かれたラベルを伴い、頭蓋計測値も駒井編（1964：41 頁第 2 表）の値と合致することから、昭和 22 年発掘調査出土第 12 号人骨と断定できる。頑丈な四肢骨、狭い大坐骨切痕などから明らかに男性であり、歯の摩耗が著しく、頭蓋冠の縫合の消失も進行していることからラベルのとおり高齢個体である。

第 23 号人骨：写真 WN-105 に写る埋葬人骨の頭部は北大総合博物館に「最寄 108」として保管されている。頭頂骨の鱗縁と上プテリオン骨の形状、歯根が露出した下顎右第一大臼歯、下顎体の破損など、写真で確認できる特徴が実物と明確に一致する（図 3G–J)。「最寄 108」は「二十三号 十月二日 頭蓋骨」と書かれた紙片を伴う。頭蓋冠の縫合は外板では消失が進んでいないものの、内板でほぼ消失しており、歯の咬耗は著しい。これらから熟年と推定される。これは駒井編（1964：41 頁第 1 表）の記載「老年」とも整合する。なお、写真 WN-105 では、上腕骨、橈骨、尺骨、大腿骨、脛骨、腓骨各 1 点が、その遠位が頭骨の方向を向くようにして並べられている。現在、これら四肢骨の所在は確認できていない。

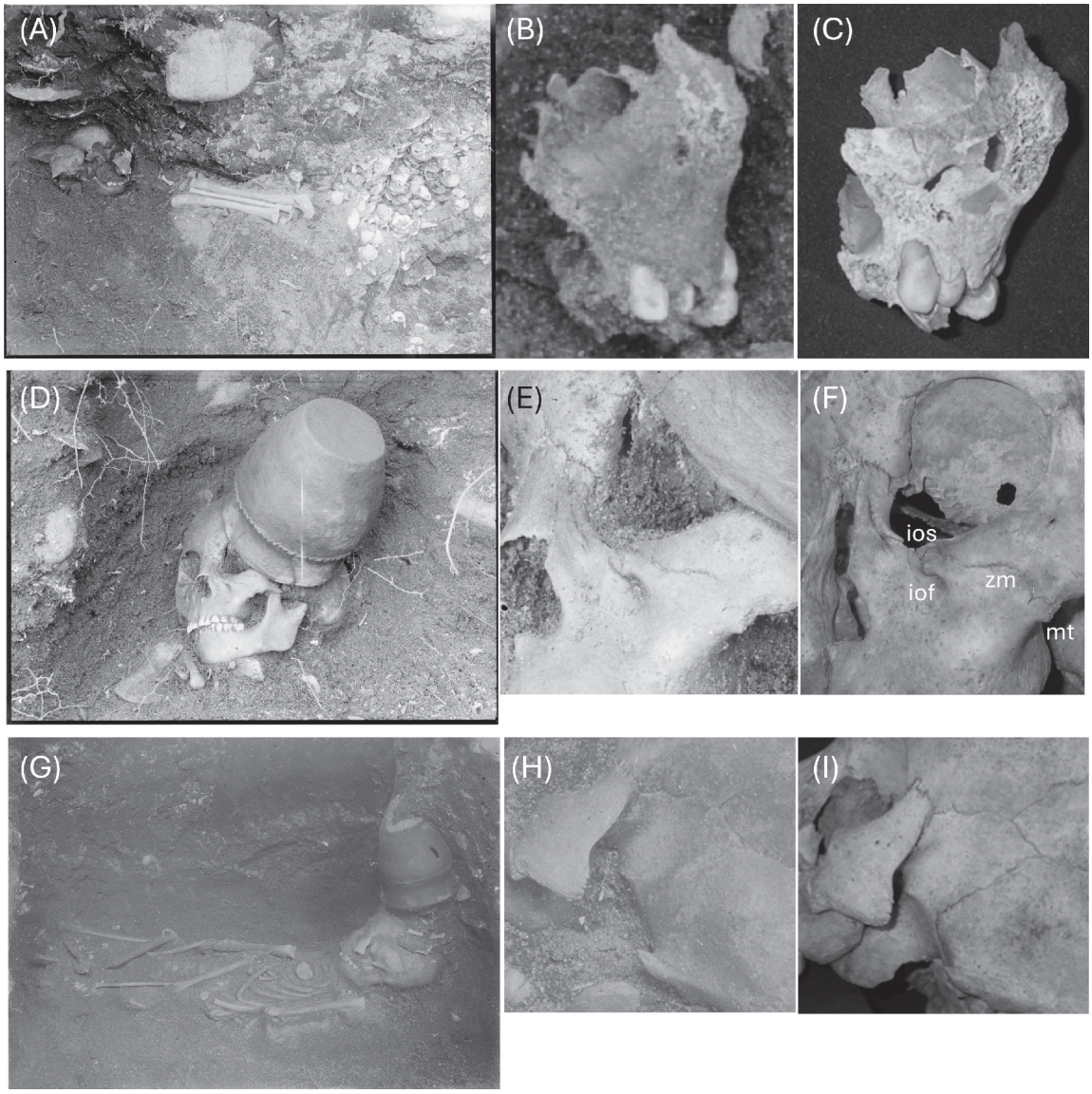



（A–F）第 12 号人骨、（G–J）第 23 号人骨。

（A）WN-104、（B）WN-104 拡大、（C）「最寄 98」頭骨の眉弓付近、sn：鼻上縫合、sof：眼窩上孔、fn：前頭切痕。
（D）WN-103、（E）WN-103 拡大、（F）「最寄 98」頭骨の右側面、tz：横頬骨縫合痕跡。

（G）WN-105、（H）WN-105 拡大、（I）「最寄 108」頭骨の右側面、sq：頭頂骨の鱗縁、ep：上プテリオン骨、（J）「最寄 108」の下顎骨。

図 3　DA 写真の人骨画像と実物の対比①




（A–C）第 28 号人骨、（D–F）第 29 号人骨、（G–I）第 7 号人骨。

（A）WN-106、（B）WN-106 拡大、（C）「最寄 110」左上顎骨の前面。

（D）WN-107、（E）WN-107 拡大、（F）「最寄 111」頭骨の左頬部、zm：頬骨上顎縫合、ios：眼窩下縫合、iof：眼窩下孔、mt：頬骨結節。

（G）WN-73、（H）WN-73 拡大、（I）「最寄 109」頭骨の左側面。

図 4　DA 写真の人骨画像と実物の対比②

第 28 号人骨：写真 WN-106 に写る埋葬人骨の頭部は北大総合博物館に「最寄 110」として保管されている。歯槽の破損によって未萌出の上顎左犬歯と同第一小臼歯が露出した左上顎骨など、写真で確認できる特徴が実物と明確に一致する（図 4A–C）。「最寄 110」は「二十八号 十月七日」と書かれた封筒を伴う。歯の形成状況（AlQahtani et al. 2010）から 8 歳前後の小児と推定される。これは駒井編（1964：41 頁第 1 表）の記載「小児」と合致する。写真 WN-106 には下肢骨も写っているが、現在の所在はつかめていない。

第 29 号人骨：写真 WN-107 に写る埋葬人骨は北大総合博物館に「最寄 111」として保管されている。頬骨上顎縫合や眼窩下縫合の走行、眼窩下孔や頬骨結節の形状など、写真で確認できる特徴が実物と明確に一致する（図 4D–F）。「最寄 111」に付随するラベルや封筒には、「十月七日 二十九号」、「●和二十三年度竪穴隣接第二貝塚出土」、「十月七日竪穴附近貝塚」と書かれている（●の箇所は破れている）。歯の形成状況（AlQahtani et al. 2010）から 5 歳前後の小児と推定される。これは駒井編（1964：41 頁第 1 表）の記載「小児」と合致する。

以上が乾板写真の人骨画像と実物の対比から墓番号が同定された 4 体である。これらを含む 28 基の墓から出土した人骨の現在の保管状況を表 1 にまとめた。上述の第 23、28 号人骨のほか、第 15、19、21 号人骨についても、写真で確認できる四肢骨が所在不明となっている。第 7 号人骨に関しては、報告書の所見と実物との間に齟齬が認められたので、下記のように修正する。

第 7 号人骨：写真 WN-71、WN-72、WN-73 の被写体は同一の埋葬人骨である。駒井編（1964）の 24 頁 Fig.6 は、写真 WN-72 と同じガラス乾板から複製されたものとみられるが、「第 7 号老年女性」とのキャプションが付いている。これらの写真に写る埋葬人骨は北大総合博物館に「最寄 109」として保管されている。左側頭部および頬部の縫合や頬骨下縁の形状など、写真で確認できる特徴が実物と明確に一致する（図 4G–I）。「最寄 109」に付随する紙片には「七号 十月八日 昭和二十二年十月発掘」、「22 年度モヨロ 7. 老年」と書かれており、駒井編（1964）で第 7 号人骨が老年女性と報告されていることと一致する。ところが、実際にはこの個体は小児である。歯の形成状況（AlQahtani et al. 2010）からは 8 歳前後と推定される。小児骨であるため性別の判断は難しいが、大坐骨切痕が深く腸骨稜の弯曲が強いこと（Irurita Olivares and Alemán Aguilera, 2016）からどちらかといえば男児の可能性が高い。（久保）

d）被甕土器の写真に基づく墓の時期同定

ここでは、DA の写真から被甕土器の文様等の細部が確認できた墓（4 号、5 号、6 号、7 号、10 号、15 号、19 号、29 号）について、熊木の土器編年（熊木 2018a）での位置付けを検討することで、それらの墓の時期を報告書の記載よりも詳細に特定する。

4 号墓：図 5A は 4 号墓の被甕土器 2 点である。報告書では 2 点とも「刻文」とされる（駒井編 1964：49 頁）。写真は不鮮明で細部の読み取りが難しいが、どちらの土器も頸部以下に沈線文や貼付文は無く、写真右手の土器は口縁部に刻文の列が横に 2 列または 3 列あるように、左手の土器は口縁部に肥厚帯が無いように、それぞれみえる。いずれにしてもこの 2 点の土器はどちらも熊木の編年（熊木 2018b）では刻文期に位置付けられると考えられ、上記の読み取りが正しければその後半に位置付けられる可能性が高い。

5 号墓：図 5B は 5 号墓の被甕土器である。報告書では「隆起式浮文」とされる（駒井編 1964：49 頁）。写真では口縁部上縁に刻みが付された細い貼付文が 1 本確認できる。熊木の編年では貼付文期前半に相当する。

6 号墓：図 5C は 6 号墓の被甕土器 2 個体である。報告書では 2 個体とも「刻文」とされる（駒井編 1964：49 頁）。写真では、どちらの土器も口縁部に肥厚帯は無く、右の土器は口縁部上縁と頸部に刻文が、左の土器は口縁部上縁に刻文、頸部に 1 条の沈線文が、それぞれ確認できる。熊木の編年では 2 個体とも沈線文期前半に相当する。

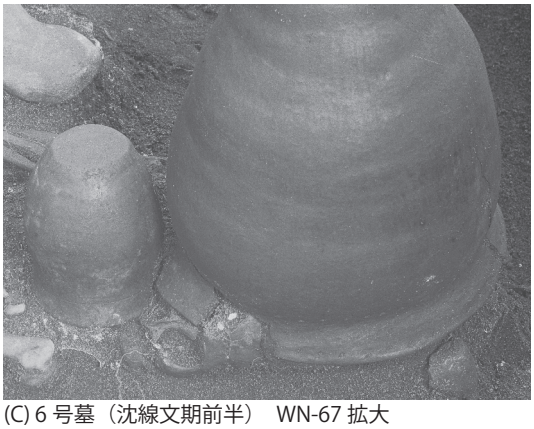
7 号墓：図 5D は 7 号墓の被甕土器である。報告書では「貼附式浮文」とされる（駒井編 1964：49 頁）。写真では口縁部に肥厚帯は無く無文で、肩部に刻みが付された細い貼付文が 1 本確認できる。熊木の編年では沈線文期後半に相当する。

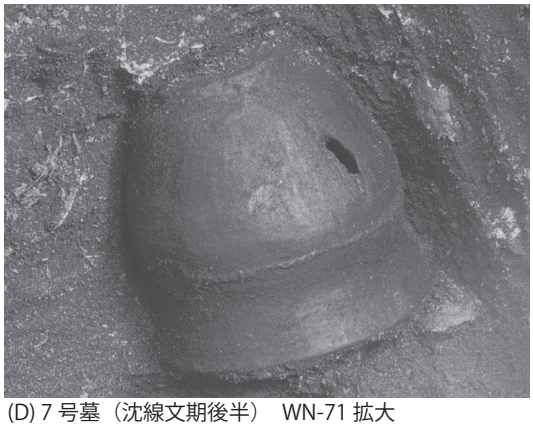
10 号墓：図 5E は 10 号墓の被甕土器である。報告書では「貼附式浮文」とされる（駒井編 1964：49 頁）。写真では口縁部に肥厚帯は無く無文で、頸部に刻みが付されたやや太い貼付文が 1 本確認できる。熊木の編年では沈線文期後半に相当するとみられるが、貼付文が太い点はより古い型式学的特徴を示すもので、沈線文期前半まで遡るかもしれない。

15 号墓：図 5F は 15 号墓の被甕土器である。報告書では「刻文」とされる（駒井編 1964：50 頁）。写真では不鮮明だが、口縁部肥厚帯は存在しないとみられ、口縁部と頸部には刻文が確認できる。肥

(A) 4 号墓（刻文期）　WN-61 拡大

(B) 5 号墓（貼付文期前半）　WN-66 拡大


(C) 6 号墓（沈線文期前半）　WN-67 拡大


(D) 7 号墓（沈線文期後半）　WN-71 拡大

(E) 10 号墓（沈線文期後半）　WN-77 拡大

(F) 15 号墓（沈線文期前半）　WN-89 拡大

(G)19 号墓（沈線文期前半）　WN-94 拡大

図 5　被甕土器の写真に基づく墓の時期同定

厚帯が無いとすれば熊木の編年では沈線文期前半に相当する。なお、報告書に 15 号の副葬土器として掲載された写真（駒井編 1964：62 頁 Fig.7-15）は無文とみられるが、これ 4-b）節で後述するように図版に誤りがあり、15 号の被甕土器ではないと考えられる。

19 号墓：図 5G は 19 号墓の被甕土器である。報告書では「刻文」とされる（駒井編 1964：50 頁）。写真では口縁部に肥厚帯は無く、口縁部下縁には刻文が確認できる。熊木の編年では沈線文期前半に相当する。

29 号墓：図 4D は 29 号墓の写真である。被甕土器に関する記述は報告書には掲載されていないが、写真では口縁部に肥厚帯は無く無文で、肩部には刻みもしくは指でひねりを加えた細い貼付文が確認できる。熊木の編年では沈線文期後半に相当する。

なお、11 号墓と 20 号墓 (注 3) の被甕土器についても DA の写真により文様の細部などが確認できたが、報告書の分類と熊木の編年上の位置づけの間に大きな齟齬はないので、写真と説明は省略し、対比の結果のみを表 1 に記しておく。また、26 号墓の被甕土器を撮影した写真は DA の中には確認できず詳細が不明であったが、この土器については他の情報から該当する実物資料が特定された。詳細は 4-b）節で後述する。

ちなみに 2-c）節で写真が特定された 28 号墓については、報告書 41 頁第 1 表では被甕土器があるとされるが、文様についての記載はなく、DA の写真でも土器は確認できないため、土器編年上の位置づけは困難である。（熊木）

### 3. 竪穴住居跡と住居内骨塚の再検討

#### a）7 号竪穴の骨塚の数と住居の建て替え

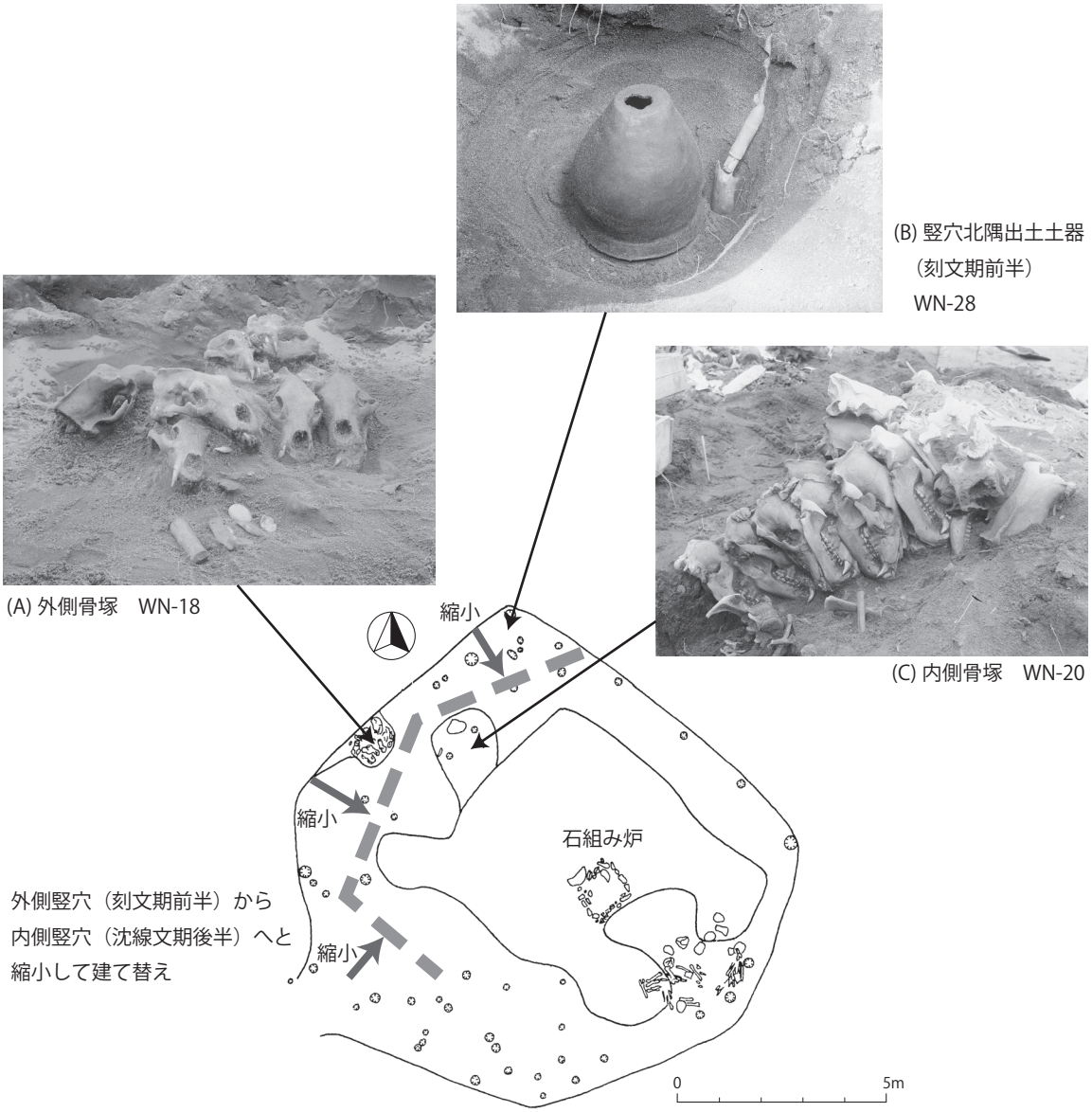
「モヨロ調査団」の調査では、前節までに検討した墓のほかにオホーツク文化の竪穴住居跡が 2 軒発掘されている。ここでは、この 2 軒の住居跡（7 号竪穴と 10 号竪穴）について、特に住居内の骨塚の記録を中心に DA の写真を検討し、現在の研究の中でこれらの住居跡の発掘成果を再評価する。

まずは 1947 年に発掘調査された 7 号竪穴の記録である。7 号竪穴の骨塚の写真としては図 6A と図 6C の写真が有名であるが、これはそれぞれ別の骨塚を撮影したものであり、この住居跡には 2 基の骨塚が存在している。報告書の所見と対応させると、6A の骨塚は「竪穴の西北壁に近い砂床に、熊の頭骨が 9 個東向きに並べてあった」ものに、6C の骨塚は「貼り床の上、恰も炉の西北にあたって、熊、鹿、海獣の頭骨などが山と積まれていた」（駒井編 1964：12 頁）ものに相当する。両者の位置関係は図 6 のとおりで、この両者を一枚に収めた写真が図 6D となる。以下、前者を「外側骨塚」、後者を「内側骨塚」と呼ぶことにしよう。

この住居跡内に 2 基の骨塚があることについて、それが何を意味するのか、これまでほとんど注意が払われてこなかった。ここで注目したいのは、それぞれの骨塚の時期と内容の違いである。まず、外側骨塚の時期については図 6B の出土土器が参考になろう。これは「竪穴の北隅に近く、大きな完形の土器が伏せてあって、底に孔をあけてありました」（名取 1948：122 頁）とされているものである (注 4)。写真では口縁部肥厚帯の下縁と肩部に刻文系文様を有しているのが確認できるので、熊木の編年では刻文期前半に相当する。この土器と外側骨塚はどちらも住居跡の北西側の壁際に位置しており、両者は同時期で、この住居跡に伴うものとみるのが妥当であろう。

一方、内側骨塚の時期はいつだろうか。図 6D では内側骨塚の上部に平石が乗っているのが確認できるが、その平石周辺の近影が図 6E の写真である。この図 6E の中央に写っている土器は、破片資料ではあるが内側骨塚に伴うと判断して良いだろう。図 6E をみると口縁部には肥厚帯はなく無文で、肩部には刻み目のある細い貼付文が施されており、熊木の編年では沈線文期後半に相当する。この土器が内側骨塚の時期を示すのであれば、外側骨塚とは大きな時期差が生じることになり、二つの骨塚が一つの住居内で同時に存在したとみるのは難しくなる。

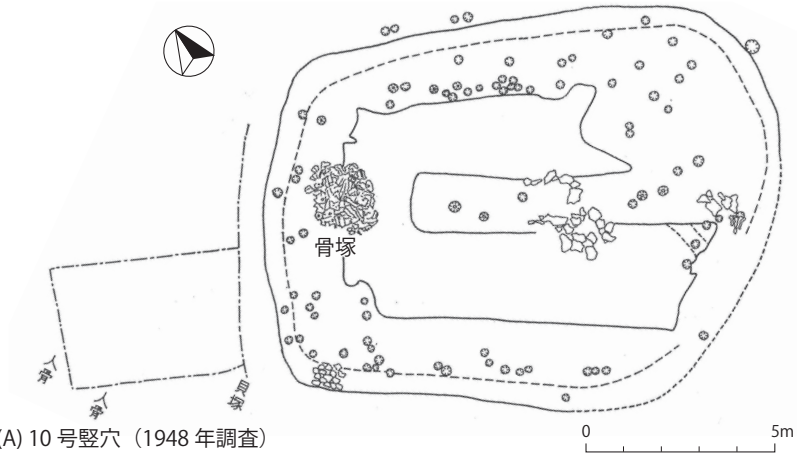
一見矛盾するこの骨塚の時期差については、7 号竪穴では入れ子状の建て替え（熊木 2021）がおこなわれていた、とみなすことで説明が可能になろう。すなわち、刻文期前半に外側骨塚と住居跡北隅の出土土器を伴う位置に奥壁がある住居がまずは作られ、そののちに、その内側となる内側骨塚の位置まで壁をずらして縮小して住居が建て替えられ、沈線文期後半まで利用されたと解釈するわけである (注 5)。7 号竪穴内の南西部には柱穴の列が複数あるようにみられる点や、貼床の南西側の空間が北東側よりも広い点、内側骨塚の位置が住居跡の中軸線（5 角形の頂部と外側骨塚を結ぶ線）よりも東側に寄っている点は、住居跡の南西側の壁も骨塚側（＝奥壁側）と同様に内側に縮小されたことをうかがわせる。こうした入れ子状の建て替えはオホーツク文化ではよくみられるものであり、モヨロ貝塚でも 9 号竪穴や 10 号下層竪穴住居跡で典型的な例が確認されている（網走市教委編 2009）。7 号竪穴でもこうした建て替えがおこなわれていた可能性は十



(D)（左奥から）外側骨塚、内側骨塚、石組み炉　WN-15

(E) 内側骨塚出土土器（沈線文期後半）
WN-21 拡大

図６　７号竪穴の骨塚と建て替えの推定




(A) 10 号竪穴（1948 年調査）

(B) 手前（北西方向）が奥壁側　WN-34

(C) 左（北西方向）が奥壁側。奥壁側から住居内部に向かってクマの頭骨を並べた列が 5 列以上確認できる　WN-42

図 7　10 号竪穴と骨塚

分に考えられよう。

外側骨塚と内側骨塚の違いで注目されるもう一つの点は、骨塚を構成する動物種の差である。先に引用した報告書の記述によれば、外側骨塚では「熊の頭骨が 9 個」という記載のみなのに対し、内側骨塚では「熊、鹿、海獣の頭骨など」とされており、構成種の内容には違いが認められる。骨塚の詳細な分析結果は示されていないため不確実ではあるものの、このような構成種の違いは道東部における骨塚の時期差、具体的には刻文期まではクマの頭骨を中心に肉食陸獣のそれを加える構成、貼付文期になるとさらにシカの頭骨を加える構成になるという差（佐藤 2023）を反映している可能性が高いと考えられる。そうであるならば、このような骨塚の構成種の差も、7 号竪穴で時期をずらした入れ子状の建て替えがおこなわれていたことの傍証になると考えられよう。（熊木）

b）10 号竪穴の骨塚の規模

次に、1948 年に発掘調査された 10 号竪穴（図 7A）の骨塚（図 7B-C）に注目してみたい。この 10 号竪穴は、貼付文期の長さ 14m に及ぶ大型住居である（注 6）。住居内の奥壁側（北西部）にある骨塚については、報告書では「熊、鹿、兎、狐、犬、海獣、鳥類などの頭骨その他が、高く積まれ」（駒井編 1964：17 頁）とあるのみで詳細な分析結果は示されていないが、DA の写真（図 7C）から判断する限り、この骨塚では奥壁側（北西方向：写真左手）から住居内部（南東方向：写真右手）に向かって吻部を住居の内部側に向けたクマ頭骨の縦列が 5 列以上確認できる。この縦列の数に加えて、全体の体積をみても（図 7B）この骨塚は現在、詳細が把握されている中で最大規模のトコロチャシ跡遺跡 7a 号骨塚（佐藤 2012）と少なくとも同等程度か、おそらくは上回るとみなすことが可能であろう。トコロチャシ跡 7a 号骨塚からは最小個体数で「ヒグマが 110 体、エゾシカが 69 体、タヌキが 30 体、キツネが 26 体」（佐藤 2012：314 頁）もの頭骨や下顎骨等が出土しているが、それを上回る可能性が考えられるわけである。このような大規模な骨塚がオホーツク文化の社会において持つ意味については以前に考察したことがあるので（熊木 2023）ここでは繰り返さないが、モヨロ貝塚にこうした規模の骨塚が存在していたことは、オホーツク文化の動物儀礼の研究はもとより、当時の社会の中でのモヨロ貝塚の位置づけなど、オホーツク文化の集落間の関係や社会構造を考える上で極めて重要な事例として、あらためて注目すべきであると考えられる。（熊木）

後列左端（↓）の松野正彦とみられる人物の拡大写真

図 8　調査関係者集合写真（1947 年）　WN-135

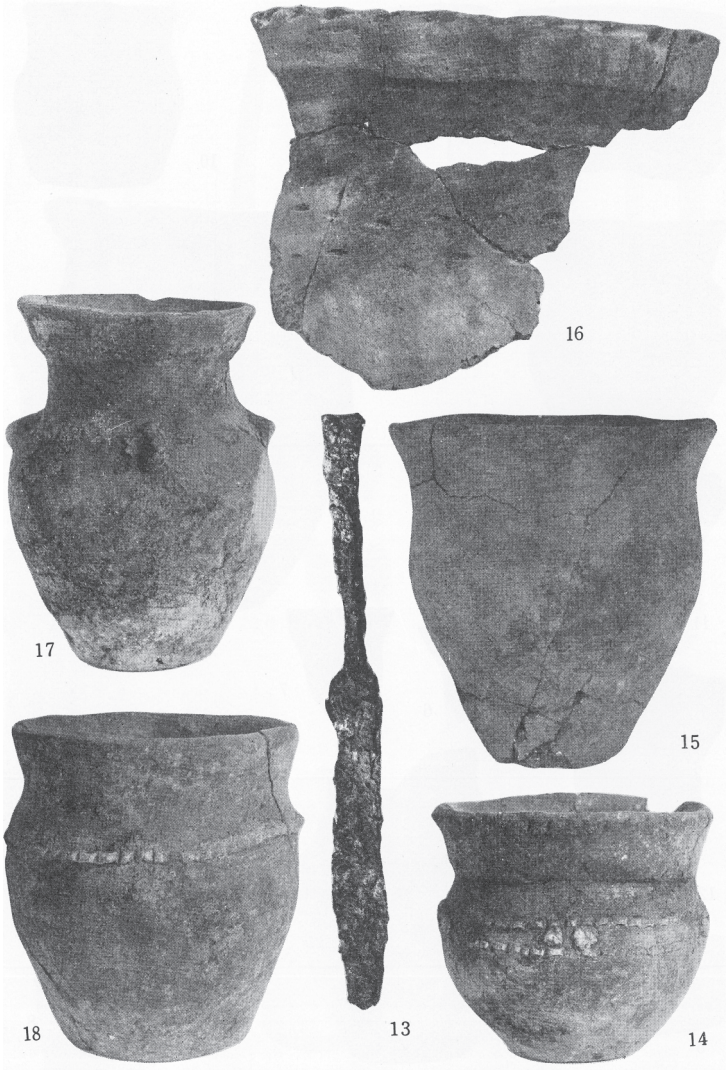
4. 新たに判明したその他の情報

a）集合写真の人物特定

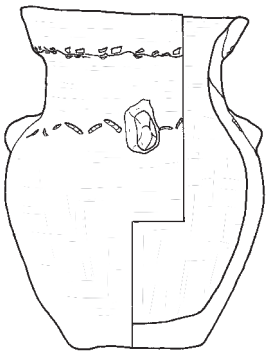
DA には遺跡の写真のほか、調査関係者の集合写真も掲載している。そのなかで、DA 公開時には撮影された人物が特定できなかったが、その後の調査で判明した写真があるので紹介する。

図 8 は 1947 年に 7 号竪穴の東壁の前で撮影された集合写真である（注 7）。人物については駒井（1977）の口絵などを参照して特定し、前列右より、名取武光、米村喜男衛、原田淑人、児玉作左衛門、伊藤昌一。後列右より、田辺義一、井口大介、駒井和愛、中川成夫、小林知生、中島寿雄、大場利夫と DA に掲載したが、後列左端の人物は確定できず、参加者記録からの消去法で「松野正彦である可能性が高い」としていた。今回、北大医学部創立 60 周年を記念した写真集（北大医学部創立 60 周年記念写真集出版委員会 1983）を参照することで人物特定を試みた。同写真集には、松野の写真が計 6 点掲載されている。撮影時期はそれぞれ 1941 年 7 月（25 歳）、1946 年 10 月 21 日（31 歳）、1956 年 6 月（40 歳）、同年某日（40 ～ 41 歳）、1970 年（54 ～ 55 歳）、および晩年（～ 61 歳）である。これらの写真から、加齢や撮影条件の影響を受けにくい顔の特徴を把握できる。写真照合の結果、後列左端の人物が松野本人であることを確認した。（久保・熊木）

b）副葬土器の写真に関する報告書の誤記と正しい墓番号の推定




(A) 報告書に掲載された墓の副葬品。キャプションの数字が墓番号に対応するとされるが、全ての番号が誤りである。正しくは、14 は 16 号墓、17 は 26 号墓の副葬品とみられる



(B) 左図 A-17 に対応する土器。26 号墓の副葬品とみられる（市立函館博物館所蔵）

図 9　報告書（駒井編 1964）に掲載された副葬品及び対応する資料（S=1/3）

本文 3-b）節と 3-d）節で触れたように、副葬土器等を掲載した報告書 62 頁 Fig.7（図 9A）の写真には、キャプションとして付された墓番号に誤りがある。14 号墓出土とされた図 9A-14 の土器が 16 号墓のそれであったことは前述したとおりだが、同図の他の遺物も全て、付されているキャプションの墓番号には誤りがある。ここでは詳述しないが、そのことは報告書 54 頁第 1 表などの報告書本文の記載と、図 9A の遺物が整合しないことをみれば明らかである。以下では本来の墓番号が特定できた資料についてのみ詳細を述べる。

26 号墓：図 9A-17 は 17 号墓ではなく、26 号墓の被甕土器である。この特定の根拠となったのが、市立函館博物館が所蔵する「児玉コレクション」の土器（図 9B）（熊木 2018a）に付されていた「M. 人 26. 土」の注記である（熊木 2018a：285 頁表 30）。この注記が現在、北大総合博物館が保管するモヨロ貝塚収集資料の書式と同一で、「モヨロ貝塚 26 号人骨の土器」を示す可能性が極めて高いことは、同館が保管する 20 号墓や 15 号墓の副葬品に付された同様の書式のラベル（「M. 人 . 20」など。中沢ほか編 2025：235-237 頁）をみれば明らかである。また、熊木（2018a）の計測によればこの土器の法量は口径 8.9cm、器高 13.5cm、底径 5.2cm であるが、報告書によれば 26 号墓の被甕土器のそれは 8.8cm、13.5cm、5cm であり（駒井編 1964：51 頁）、両者はほぼ一致する。器形や文様の特徴が一致することと合わせてみると、この土器が 26 号

墓の被甕土器であることは疑いないであろう。熊木の編年では刻文期後半に位置づけられる。

なお、上記以外の図 9A-13・15・16・18 の資料については、正しい墓番号を特定できなかった[注8]。（熊木）

## おわりに

本文 3-b）節と 3-d）節では DA の写真に撮影された墓の被甕土器に言及した。これらの被甕土器を含めた墓の副葬品の所在はこれまでほとんど公開されてこなかったが、北大大学院医学研究院人類進化学教室に保管されていた資料（現在は北大総合博物館が保管）にこれらの副葬品の一部が含まれていることが、最近出版されたカタログで公開された（中沢ほか編 2025）。ただし、本稿で言及した被甕土器に関しては、これらの北大所蔵資料中には 20 号墓出土の 1 点しか含まれていないとみられる。現在、これ以外に所在が判明しているのは本文 4-b）で触れた 26 号墓の土器のみであり、これら以外の被甕土器は全て所在不明となっている。これらの土器の所在の特定は、今後の重要な課題であろう。

なお、本稿に掲載した内容のうち、特に本文 3-c）に掲載した人骨からの同定結果や、4-a）の人物特定は、2025 年 9 月末日現在、DA の解説には反映されていない。これについては後日、何らかの形で修正することを予定している。（熊木）

## 注

1）東京大学大学院人文社会系研究科附属北海文化研究常呂実習施設所蔵　史跡モヨロ貝塚ガラス乾板写真デジタルアーカイブ　https://www.l.u-tokyo.ac.jp/moyoro/index.html　（2019 年 2 月 4 日公開、2025 年 9 月 30 日閲覧）

2）常呂実習施設所蔵　史跡モヨロ貝塚ガラス乾板写真について https://www.l.u-tokyo.ac.jp/moyoro/explanation2.html （2019 年 2 月 4 日公開、2025 年 9 月 30 日閲覧）

3）20 号墓の被甕土器の実物は北大総合博物館に所蔵されており、画像が公開されている（中沢ほか編 2025：140 頁 PLATE95）。

4）底部穿孔であれば副葬土器の可能性も考えられるが、大場利夫の報告によればこの土器は副葬品ではないとされている（大場 1956：215 頁）。

5）外側骨塚の時期（刻文期前半：6 世紀後葉～ 7 世紀前葉）から内側骨塚の時期（沈線文期後半：8 世紀前葉）までの間には 100 年程度の期間が想定される。この期間内に継続して何度か建て替えがおこなわれたのか、あるいは住居が利用されない「空白期間」があったのかなどについては、遺構の詳細な記録がないため不明とせざるを得ない。モヨロ貝塚の他の住居跡や、他の遺跡の建て替えが認められた住居跡の例からすると、継続と空白ありのどちらの可能性も考えられる。なお、2004 年と 2006 年におこなわれた 7 号竪穴の再発掘調査の際には、全て過去の発掘調査の埋め戻し土から出土したものであるが、刻文期前半から沈線文期後半までの土器破片が回収されており（網走市教委 2009：179 頁 Fig.121-1 ～ 4）、図示はされていないがそこには「貼付文系の破片資料も混在している」（同上：177 頁）とされている。これらの土器は住居跡に確実に伴うとはいえず判断が難しいが、少なくとも本文で想定した 7 号竪穴の時期と大きく矛盾するものではないといえよう。

6）図 7A に示した 10 号竪穴の床面の下層からは、入れ子状に 2 回建て替えられた住居跡が確認されている（網走市教委 2009：168-175 頁の「10 号下層竪穴住居跡 a・b・c」）。これら下層の住居跡の時期は概ね刻文期後半～沈線文期前半と考えられている。また、図 7A で 10 号竪穴の西壁外側に示されている区画が、本文 2-a）で触れた 28 号墓と 29 号墓が発掘されたトレンチである。図 7A で「人骨」とされているのがこれら 2 基の墓に該当するとみられるが、どちらが 28 号ないし 29 号に該当するのかは不明である。

7）この写真は報告書には掲載されていないが、米村（2004：30 頁図 16）に同じ写真がある。なお、同時期に撮影された WN-134 の写真で DA では「不詳」とされている人物も、本文と同様の理由で松野正彦と判断できる。

8）図 9A-13 の鉄鉾は、鉄鉾が副葬された墓は 15 号墓に限られる（駒井編 1964：54 頁第 1 表）ことからすると同墓出土の可能性が高く、また、図 9A-18 の土器は器形や文様の特徴からみて 7 号墓の被甕土器である可能性が考えられたが、いずれも情報が不足しており、特定には至らなかった。さらに、図 9A-16 は、報告書本文中で土器の破片資料を図版に掲載したことを明記しているのが 18 号墓のみなので（駒井編 1964：50 頁）、同墓出土の可能性があるが、これも特定には至っていない。

## 図の出典

図 1：駒井編 1964 の 1 頁 Fig.10 をもとに改変（熊

木作成）
図 3(C)・(F)・(I)・(J)：久保撮影
図 4(C)・(F)・(I)：久保撮影
図 6 中央の 7 号竪穴平面図：駒井編 1964 の 9 頁 Fig.2 をもとに改変（熊木作成）
図 7(A)：駒井編 1964 の 10 頁 Fig.3 をもとに改変（熊木作成）
図 9(A)：駒井編 1964 の 62 頁 Fig.7 を転載
図 9(B)：熊木 2018a の 274 頁図 106-7 を転載

## 引用文献


網走市教育委員会編 2009『史跡最寄貝塚』網走市教育委員会

大場利夫 1956「モヨロ貝塚出土のオホーツク土器」北方文化研究報告 11、187-256 頁

熊木俊朗 2018a『オホーツク海南岸地域古代土器の研究』北海道出版企画センター

熊木俊朗 2018b『モヨロ文化市民講座　オホーツク文化調査の今昔』網走市教育委員会 https://www.l.u-tokyo.ac.jp/tokoro/images/academic/moyorokouza.pdf（2025 年 9 月 30 日閲覧）

熊木俊朗 2020「オホーツク文化の集落」『北海道に残る二万三千の竪穴（くぼみ）』北海道考古学会、11-20 頁

熊木俊朗 2021「住居の廃絶と建て替え」『オホーツク文化　あなたの知らない古代』横浜ユーラシア文化館ほか、14 頁

熊木俊朗 2023「オホーツク文化の集落と社会」『季刊考古学・別冊 42　北海道考古学の最前線』雄山閣、90-93 頁

駒井和愛 1977『琅玕』駒井和愛博士記念会

駒井和愛編 1964『オホーツク海沿岸・知床半島の遺跡　下巻　別篇　網走モヨロ貝塚』東京大学文学部

佐藤孝雄 2012「トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点 7 号・9 号・10 号竪穴の脊椎動物遺体」『トコロチャシ跡遺跡オホーツク地点』東京大学大学院人文社会系研究科・北見市教育委員会、312-359 頁 https://repository.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/records/41750

佐藤孝雄 2023「オホーツク文化集団の動物資源利用」『何が歴史を動かしたのか　第 2 巻　弥生文化と世界の考古学』雄山閣、181-192 頁

中沢祐一ほか編 2025『北海道大学所蔵モヨロ貝塚（網走市）収集考古資料』北海道大学 http://hdl.handle.net/2115/94609

北大医学部創立 60 周年記念写真集出版委員会 1983『写真集　医学部 60 年の歩み』北海道大学医学部同窓会

米村衛 2004『シリーズ「遺跡を学ぶ」001　北辺の海の民　モヨロ貝塚』新泉社

AlQahtani S.J., Hector M.P., and Liversidge H.M. (2010) The London atlas of human tooth development and eruption. American Journal of Physical Anthropology, 142: 481–490.

Irurita Olivares J. and Alemán Aguilera I. (2016) Validation of the sex estimation method elaborated by Schutkowski in the Granada Osteological Collection of identified infant and young children: Analysis of the controversy between the different ways of analyzing and interpreting the results. International Journal of Legal Medicine, 130: 1623–1632.